

令和三年六月三日

新型コロナ感染防止のため「メール句会」「オンライン句評会」を実施。
兼題『蛩』『乾』

齊藤 まさお

蛩火や久留米餅のほのとして
籠り居の心乾きし五月間
来し方のよぎる夕暮れ瓜の花
万緑や独りの朝のカフェテラス
六月の風のぬるさよ雨模様

中村 晃也

梅雨の窓夫のシャツの生乾き
国宝の乾漆像や蜘蛛の糸
はつきりと言へばよかつた蛩の夜
サヨナラの声風になる蛩の夜
紫陽花や空蒼ければ空の色

宮原 凧

夕暮れの袈裟がけに飛ぶ初つばめ
ブックオフまとめ買いして梅雨籠り
フランスパン抱へ踏切待ち薄暑
六月やお気に入りシャツ生乾き
亡き人を追ふてゐるかに夕蛩

土屋 しおん

川辺りのワンピースの背に蛩来て
酸っぱさを知りて今年の蛩狩り
乾燥機音を背びらに梅雨読書
紫陽花の乾き心や水を遣り
走り梅雨鬼籍の人とすれ違ひ

内藤 あした

ビオトープ蛩ほーほと光りたり
黒雲を縁取る夕陽梅雨さなか
ジムを出てノドの乾きや夏は来ぬ
手の平をそつと開きて蛩見せ
切通し雫の落ちて夏さざす

大津 そうかい

蛇苺赤を極めし寂しさよ
朝までの逢瀬儚し蛩舞ふ
乾飯や皇子の辿りし石畳
枇杷の実の金と煌めく夜明けかな
庇越え屋根越え白き夏の蝶

新田 ゆふき

乾物屋に煮干豆昆布梅雨の晴
誰が魂か肩に触れたる蛩かな
梅雨晴やペチュニアの鉢売り切れて
トレニアの緑の淡き梅雨曇
溪流のドレミファ橋や蛙鳴く

首藤 しずを

煌めきは曜変のごと蛩群る
乾かせど髪の芯まで湿る梅雨
子ら率ゐ母の威風や夏鴨や
リラ冷えや悲しきことを告ぐる朝
人影に紛ふ紫陽花夜の雨

長尾 進一郎

ひとすじの望みとなりて蛩舞ふ
水溜りの乾くに足らぬ梅雨晴間
枝枝の緑に埋まる速さかな
どくだみの褒めて貰へぬ伸び盛り
小さき金魚親と並びて主の顔

高橋 由紀子

昨日一つ今日は三つの茱萸の赤
青しぐれ人なき角の乾物屋
背に重く孫眠り込む蛩狩り
鷺の子の踏みしめて行く青田風
夏きさら亀の暴れて竿揺れる

森田 元斐

梔子の真白く咲きぬ宵の風
乾杯を待つこと久し不如帰
飛ぶ蛩瀬音に沿ひて列をなし
谷川の闇に消え行く蛩の火
梅雨湿めりバス待つ人の月曜日

安藤 晃二

夕影や十葉の白浴道埋む
葉の裏に点滅鈍き螢かな

浴室に衣を乾す朝や走り梅雨

山法師の浅葱に染まり雨模様

人垣や舗道よろめく四十雀

志村 良知

谷暗く光跡縦に螢かな

干す頃は事態変はれと梅を漬く

苗札に聞き知る名前ハブ買ふ

紫陽花の色の深まり雨きざす

親鴉威嚇の羽音巢は近し

今回は、令和三年七月一日（木）です。

兼題は、斉藤まさおさん出題の『昼寝』並びに、

知世先生出題の『青』です。

季語を学ぶ 初学にかえて

西川 知世

最近の昼寝は夏の季節感が弱まってしまつて、

昼寝そのものの質が変わつてきているように思う。

近代の句は暑さより心の内側に目をむける句が多くなつた。しかし、有季定型を俳句の基本とするので、季節感から離れることに挑戦したい。

三尺寝は三尺ぐらいの仕事場の狭い場所で寝る、あるいは日蔭が三尺ほど移るぐらいの時間を寝ることだそう。

蠅いとふ身を古郷に昼寝かな

蕪村

逢坂や荷牛の上に一昼寝

一茶

愕然と昼寝さめたる一人かな

河東碧梧桐

極楽の刺りの風や昼寝ざめ

山口誓子

昼寝覚山しつとりと近々と

阿部みどり女

中年やよろめき出づる昼寝覚

西東三鬼

桐の木の向ふ桐の木昼寝村

波多野爽波

人恋ひてかなしきときを昼寝かな

高柳重信

ここに岡本太郎のオブジェ三尺寝

田中裕明

声かけて昼寝の足の返事あり

小沢昭一

昼寝の子起きしにあらす裏返る

三村純也

「昼寝」が夏の季語であるのには、労働や住環境の歴史が大きくある。のびのびと眠ることではなく、夏は疲れが激しく夜眠りにくいので、昼の短い睡眠で体の回復の必要があったことからくる。